

聞き書き

日本統治時代を生きた台湾人への面接調査報告（2）

柴 公也（台湾・朝鮮問題研究家）

（2）客家人の街で

黄秀英（1927年生）中壠家政女学校卒

私は、新竹州桃園の楊梅という街で生まれました。楊梅は、客家人（*本来、華北地方に住んでいたが、戦乱等により華南地方に移住してきた漢族。当時は広東人と呼ばれていたが、本来の広東語を使う広東人とは違う）の街でした。先に来た福佬人（*福建省南部の漢族）は、土地を独占して地主になったのですが、客家人は後に来て土地がなかったので山地に近いところに入植したのです。それで、桃園の山地の客家人の村では、お茶などを植えておりました。

福佬人と客家人は、言葉が通じません。私は客家人ですから客家語は話せますが、福佬語は少ししか解りません。福佬人と客家人は、言葉や習慣が違うので良く喧嘩しておりました。特に、水争いになると、鍬や鎌などを武器にして殺し合いの喧嘩をしていたのです。

日本が入って来るまでは、福佬人と客家人、それらと先住民（*山地に住んでいたオーストロネシア系の住民）はお互い別々で反目しておりました。私の姑の父は、先住民が平地に下りて来るのを監視する仕事をしていましたが、先住民に監視小屋で殺されてしまいました。日本領になってからは、喧嘩は止めましたが、それでも、終戦までは、福佬人と客家人は住む地域が分かれていたのです。戦後、日本人が帰国して中国人が来ると、客家人は街へ出て住むようになりました。

私の両親も客家人ですが、両親は昔の人ですから、見合いなどせず結婚式の日に初めて会ったそうです。二人とも公学校は出ていませんが、後で国語講習所に通いました。それでも、日本語は片言しか話せませんでした。両親とも普段は伝統的な客家の服に裸足で、笠を被って農作業に励んでいました。

父は土地の仲介人でしたので、地主と良く付き合っておりました。母は客家人なので、纏足の陋習は免れておりました。母は私が12歳の時、40歳で亡くなっています。父も17歳の時、50歳で逝ってしまい、その後は、兄と一緒に暮らしておりました。

両親は生前、名前を呼び合うことはなく、ただ用件だけを言っていました。私は、名前の「英」の前に愛称を表す「阿」を付けて、「阿英」と客家語の漢字音で呼ばれておりました。

家は、四合院と呼ばれる漢族の伝統的な家屋で、中庭を挟んで左右に四棟の瓦屋根の建物が対称的に配置されていました。家の周りには、煉瓦の塀で囲っておりました。当時は、治安が非常に良好だったので、門の戸を閉める習慣はなくなっていました。室内は土間

で、板の寝台が隅に置かれていました。また、中庭の奥にある中央の正庁には、先祖の位牌が祀られています。

食事の時は、男女の家族が同じテーブルに座っておりました。米は在来米と蓬莱米の両方を食べています。おかずに肉や魚が出てくるのは祭祀の時ぐらいで、普段は野菜と漬物で味噌汁はありませんでした。味噌汁や沢庵、梅干しなどは日本人に教わったものだったのです。

家には風呂桶はありませんでしたが、風呂場で手桶を使って夏は水で、冬は湯で水浴びしていました。トイレは屋内ではなく、屋外の豚小屋の側に設置しています。

当時は、衛生状態はかなり改善されていましたが、それでも蠅や蚊、蚤や虱、ゴキブリなどが多く、だいぶ悩まされました。家ごとに皆、番犬用に犬を飼い、また鼠取り用にと猫も飼っていました。

当時の楊梅は、電気や水道が通っておらず、共同井戸を使っていました。道も舗装されておらず、バスも通っていませんでした。市場はありましたが、肉や魚ぐらいしかなく、他の食品や日用品などもありません。野菜は、毎朝農家の人が天秤棒で担いで売りに来ていたのです。食堂も、簡単な汁蕎麦屋ぐらいしかありませんでした。廟や寺はありましたが、教会はありませんでした。

5歳の時、女の子でしたが、父に漢塾(*書房)に通わされました。漢塾の先生は、髭を生やして鼻眼鏡を掛けていて、見るからに怖いお爺さんでした。それで、中に入らず毎日外でぶらぶらして、お腹が空くと家に帰っておりました。母に、先生に習ったところを暗誦してみなさいと言われたのですが、私は全然出来ませんでした。それで、漢塾に行っていなかったことがばれて、鞭でこっぴどく叩かれてしまいました。私は、「漢塾には行きたくない。公学校に行きたい」と我を通して漢塾は辞めてしまいました。

その後、楊梅公学校に入学しました。校舎は木造の平屋でしたが、壁はセメントで、講堂もありました。校長と教頭は日本人で、先生方も日本人が多かったのですが、何人か客家人の先生もおりました。一学年3クラスで、男子2クラス、女子1クラスでした。当時は、女の子は将来嫁に行くのだから勉強しなくとも良いという考え方でした。公学校の制服は、セーラー服でした。普段は、裸足に風呂敷でしたが、祝日には、運動靴を手にして学校に着いてから履き、行事が終わると脱いで裸足で家に帰っていたのです。

公学校では、一年生の時から客家人の先生に日本語で教わりました。最初は日本語が解らなくても、一〜二ヶ月して慣れれば解るようになりました。辞書などありませんから、単語を覚えるしか方法はありませんでした。二年から六年までは日本人の先生でした。一年生はカタカナで、二年からはひらがなで勉強しています。当時は、ただ文章を読んで暗記するだけでした。そして、先生が内容について「何人いるか?」、「何をしたか?」などと質問するのです。漢字を勉強する時も、訓読みだとか音読みの区別は教えられませんでした。区別を習ったのは女学校へ入ってからです。

総督府は、福佬語や客家語、それと先住民の言葉の辞書も編纂しています。総督府は、台湾人を理解してから日本語の教育をしたのです。

それに対して国民党の場合は、台湾に来ると直ぐに福佬語と客家語を禁止しました。もし、福佬語や客家語を話すと一円罰金を取られました。日本語も、もちろん禁止されています。日本時代とは、全然やり方が違っていたのです。

三年以上になると、授業だけでなく、放課後も皆日本語で話していましたが、別に不自由はありませんでした。日本語が出来るようになると、日本人の子供とも遊ぶようになりました。近所に日本人がいましたから、そこの子と遊んでおりました。日本人は、大概役人か先生で、皆官舎に住んでいましたので、子供の間での交流はあまりありませんでした。

二年生の三学期からは九九を習いました。四・五年になると鶴亀算を教わりました。四年からは裁縫がありましたが、生地は全部日本から持って来ています。ただ、料理はやりませんでした。歴史や地理は五・六年になってから習いました。五・六年では修身もありました。

支那事變の最中で、男の先生は次々に徴兵されてしまい、女の先生が増えてきましたが、客家人の女の先生は、あまりおりませんでした。校長と教頭は残りましたが、後はみんな出征してしまいました。支那事變から、一年ぐらいで帰って来た先生方がいましたが、その先生方は五・六年の担任でした。

公学校三年の時、担任の鹿児島出身の女教師の首藤先生の家に住み込んでいましたが、とても可愛がってもらいました。先生は未婚でしたが、卵焼きやカレーなどを作って食べさせてくれました。先生に「どうして、こんなに美味しいものが食べられるの?」と聞いたら、「あなたも将来先生になりなさい」と言われました。それで、公学校三年の時から先生になると決めていたのです。

当時の総督府の政策は、台湾人は山林、農業、医療などに従事させて、役人にはしないというものでした。それで、優秀な台湾人の男の子は、たいいてい桃園農業などの農業学校に進学しておりました。私の夫は地主の息子ですが、成績は公学校で一番で、桃園農業学校でも首席で通したそうです。卒業後は、中壠農業学校の先生になっています。学校の実習地で、生徒に農業を教えていましたが、小作人がいたので実際に鋤や鍬を持って耕作に携わったことはありません。

金持ちでない普通の家の娘は、たいいてい家政女学校(*三年制)に入って花嫁修業のための勉強をしておりました。ただ、地主の家の子供たちは裕福ですから、中学校や高等女学校(*四年制)に通っておりました。金持ちの家の娘は台北第三高等女学校へ行き、卒業すると台湾人の医者と結婚していました。当時は、階層で皆決まっていたのです。

ある時、校長先生が「台湾人は家政女学校で充分だ」と本音を洩らしたことがありましたが、そこには明らかな差別があったのです。私が数えて15歳の時、大東亜戦争が勃発し、皇民化とか改姓名が始まり、ようやく平等な扱いを受けるようになりました。「私たちは日本人だ」という観念が植え付けられるようになったのです。

差別があったことに対しては、当時は不服でした。ただ、今考えると、台湾人は育ちが違うから内地人と一緒には出来ないと考えて、公学校と小学校とに区別したのは悪くはなかったと思います。しかし、公学校を卒業した後まで差別をしたのは、総督府の政策の誤りでした。私は成績が良かったのに、高等女学校へは行けませんでした。でも、近所の日本人の子は、私より成績が悪くても入学していたのです。

公学校の女子クラスの50人の内、女学校へ行ったのは5人だけです。その中の1人は、金持ちの娘で成績も一番でしたが、改姓名して新竹高等女学校に入りました。他の4人は中壠家政女学校に入っています。ただ、高等科に進んだ人はおられません。中には、私より5歳も年上の人もいたので、卒業してすぐ嫁に行った人も何人かおりました。

男の子の場合は、公学校を卒業して中等学校に行った子は、10人に1人もいなかったのではないのでしょうか。ただ、男の子は、二年制の高等科に行った人が結構おりました。当時は、公学校の教育だけで充分社会生活が出来たのです。

当時の社会は安定していて、治安も大変良好でした。それは、警察が厳しかったことにもよるのですが、私たちは警察が来ると素早く物陰に隠れておりました。髭を生やして、剣を提げて来るのですから怖かったのです。子供は怖がるだけでしたが、大人は悪いことをすると厳しく罰せられておりました（*台湾は、朝鮮にはない「匪徒刑罰令」という苛酷な法令があり、集団で反乱を企てたり、公共物を破壊したりすると、理由の如何を問わず死刑に処されていた）。

支那事変が始まる頃になると、「金属を出せ」、「余分な米を出せ」と警察が回って来るようになりました。それで、米を一升瓶に入れて蠟燭で蓋をし、警察が来ると、井戸に吊るして隠しておりました。

台湾では、殺人や放火は、いかなる理由であれ死刑でした。ですから、皆おとなしくしておりました。泥棒も、ほとんどいませんでした。夜は、戸を閉めるだけで鍵も掛けません。農村ですから盗む物がなかったのです。街の人は小さな商店を開いていましたが、やはり盗むような物があまりなかったのです。泥棒は、ほとんどいなかったのです。それでも、鶏を一羽盗んで捕まり、編み笠を被せられて新竹の刑務所へ引っ張られて行く人を見たことがありました。

何ヶ月かに一回、大掃除があつて合格すると「清潔」という赤い札を貼って行きました。日本が来るまでは、台湾は化外の地で、衛生状態が悪かったのです。実際、私の兄がチフスに罹って、隔離されたことがありました。マラリヤや天然痘もありました。日本が台湾に来て最初に行ったことは、衛生状態を改善することだったのです。

私は、中壠家政女学校の第一回生として、入学しました。公学校の先生は、九州の人が多かったのですが、中学校や女学校の先生は、東京の専門学校を卒業した人が多かったように思います。

日本人の生徒もおりましたが、大部分台湾人の生徒でした。日本人は、高等女学校へ入れなかった子が入って来ておりました。一学年二クラスで、一クラス50人でした。日本人の子は、一学年10人くらいでしたが、私のクラスは三人だけです。

中壠家政女学校は、入学当時は校舎が出来ておらず、郡の公会堂の脇に平屋の仮校舎を建て、中を仕切って二教室にして使っておりました。校庭はなく、近くの公園でドッジボールをするのがせいぜいで、運動会などは出来ませんでした。

女学校の制服はセーラー服でしたが、戦時中なのでスカートではなくモンペを履いていました。頭には国防色の頭巾を被り、白い靴下に黒い靴を履いて通っておりました。弁当は、二本のバナナだけでしたが、地主の娘は白米の弁当を持って来ていました。

女学校では、客家人の子も福佬人の子も仲良くしてました。皆日本語を使っていたので、話が通じました。女学校では、休み時間も放課後も日本語で話していたのです。

日本人の子は大抵成績が振るいませんでしたが、苛めたりせず仲良く付き合っておりました。日本人の子が台湾人の悪口を言うことなどはありませんでした。女学校では、男の学校と違って先輩が後輩を苛めることはなく、かえって可愛がっておりました。

二年の時、ABCを習いましたが、大東亜戦争のため英語は敵性言語として禁止され

てしまいました。家政女学校では、歴史や地理もありましたが、裁縫や料理の時間が多いのが高等女学校との違いでした。先生は日本人でしたから羽織も縫いましたが、台湾服は縫いませんでした。また、三年になってから料理の時間がありましたが、台湾料理ではなく、一週間に一回日本料理を作っていました。

また、休みの期間を利用して、タイプライターやピアノ、習字などを習っていました。女学校には、作法の時間もありました。40分間正座するのですが、誰も痛いとか痺れるとかは言いませんでした。まだ子供でしたから台湾の習慣が身に付いているわけではないし、自分たちは日本人だと思っていたから、先生に言われた通りにしていたのです。

台湾人なのに、なぜ日本式のものを教わるのかという疑問は全然ありませんでした。生まれた時から日本人として育てられたので、台湾人という意識がなかったのです。祖先は広東省の客家人ですが、何代も前のことですから、自分が支那人だとは考えたことはありません。両親からも、そんな話は聞いたこともありませんでした。

ただ、支那事変が始まると、父は「日本は負ける」と言い出しました。「なぜ」と聞くと、「支那は国土が広く、日本が攻めても逃げる所が一杯あるので、戦争は何時までも続くから」と言ったのです。

天皇については、学校で教わった通りに日本で一番偉い人と尊敬しておりました。ただ、年配の台湾人は教育を受けていないので、具体的なイメージはなかったようです。清朝の皇帝については、台湾は島で大陸から切り離されていたせいか、関心はありませんでした。実際、年寄りの人たちからも皇帝についての話は聞いたことはありません。

女学校の友達も、自分たちは台湾人だという意識はなかったようです。自分たちは日本人だと思っていたのでしょう。クラス内に日本人の友達もいましたが、区別はありませんでした。確かに、名前は台湾人と日本人とでは明らかな違いがありますが、意識することではなく、違和感なんか全くありませんでした。ですから、台湾の独立や支那への復帰などは夢想したこともありません。それだけ、日本の教育は徹底していたということなのでしょう。

同学年の100人中20人ぐらいが改姓名しています。私も改姓名をしたかったのですが、国語家庭という条件を満たせず、できませんでした。学校では校長に「英子(えいこ)」と日本名で呼ばれていましたが、卒業証書は戸籍上の名前の「秀英」です。友達同士では、あだ名で呼んだりしていました。

学校には寄宿舎がなかったので、駅まで40分歩き、汽車に乗って通学しておりました。日本人の級友の家にも遊びに行ったことがあります。私は真面目で勉強も良く出来ましたから、遊びに行くと級友の両親は歓迎してくれました。すでに大東亜戦争が始まっていましたが、家政女学校では普通に勉強していて、昭和18年に卒業しました。

女学校卒業の時、先生に呼ばれて、戦地での特志看護助手にならないかと勧誘されましたが、「私は先生になります」と言って断りました。卒業後、一年間は客家人の楊梅幼稚園の先生をしていました。客家語ではなく、日本語で教えていたのです。

その内に、戦局が悪化して男の先生がいなくなったので、昭和19年に母校の楊梅国民学校の助教になりました。男の先生はいないし、女学校を出た人も少なかったので、検定試験などは受けなくても校長先生の一存で入ったのです。幼稚園の先生の時の給料は覚えていませんが、楊梅国民学校の初任給は、27円でした。5円だけ手元に残して全部

家に入れておりました。

公学校で先生をしている時、自分は日本人だと思っていたし、子供たちも自分たちは日本人だと思っていたのです。それについては何の疑問もありませんでした。子供たちには、「お国のために尽くせ」とか「お前たちは台湾人だから努力しなければならない」などという教育はしていません。そんなことは言われなくても皆日本人だと思っていたし、日本のために尽くすのは当然だと思っていたからです。誰に強制されたわけでもありませんでした。

台湾人の志願兵も強制されたものではありません。楊梅の街にも何人かいましたが、皆志願して行ったのです。「本当は行きたくないのだが、回りから圧力をかけられて仕方なく志願したのだ」と言う人がいますが、私の知っている人たちは自発的に行っております。男は志願兵、女は特志看護助手でした。公学校の先生を辞めて特志看護助手になった人もおりました。軍人さんのために自分も尽くそうという気持ちの人もいたことでしょう。当時の状況から考えれば、自然な気持ちだったと思います。

昭和20年になると、空襲が頻繁になって学校には兵隊が駐留するようになったので、学校ごと田舎へ疎開することになりました。疎開先では、国語、算術、唱歌、図画などを教えておりました。戦争で布地がないので、裁縫の授業はありませんでした。

シンガポールが陥落したので、次は台湾に来るだろうからと軍事訓練も始まりました。毎朝、8時か9時になると、B29がやって来て、鉄道沿線の軍事基地や施設を爆撃していました。夕方にも、また戻って来て爆撃していたので、ほとんど勉強は出来ませんでした。

日本が負けたと聞いた時は、ただ、呆然として頭が真っ白になりました。周りの台湾人の中にも喜んでいるような人はおりませんでした。

終戦後、午前中は疎開先へ行って授業をし、午後は学校へ戻って日本兵たちの服の修理などをしておりました。それで、何人かの兵隊さんと顔見知りになって、何回か口を聞くようになりました。その中の一人が多田さんでしたが、二十二、三歳の丸顔で、礼儀正しくて可愛い兵隊さんでした。多田さんとは、個人的には二、三度話をしただけで、他には何もありませんでした。

ある日の朝、「黄先生、日本へ帰ります。日本へ付いて来て下さい。お願いします」と門の外から、家の中にいた私に元気な声を掛けて来たのです。びっくりして出て見たら、多田さんでした。「なんで、こんな山の中へ来たのか、どうして道が分かったのか、おかしいな」と思い、「えっ？」と言ったら、「先生、お元気で、お幸せに」とだけ言って、顔を真っ赤にしてみました。そのまま敬礼してから回れ右をして、丘の坂を下りて行ったのです。我に返って、「ちょっと待って！」と言ったのですが、振り向くことなく行ってしまいました。

翌日、兵隊たちは全員引揚げてしまって、学校には誰もいなくなりました。多田さんは私を可愛いと思っていたかも知れませんが、それまで二人だけで話したことは、ありませんでした。私は、突然打ち明けられて驚いた顔をしたので、多田さんも決まりが悪くなって帰って行ったのでしょう。

私は、多田さんは良い人だとは思っていましたが、特別な人だとは思っていなかったのです。当時は、男と女は別々だという封建的な考えでしたから、男の人をまともに見るといようなこともありませんでした。

日本へ留学した台湾人の男性が日本人の女性と結婚するケースは割合ありましたが、逆に日本人の男性と結婚した台湾人の女性は、ほとんどいませんでした。同僚や後輩の中にも、兵隊さんからプロポーズされた人がいますが、誰も内地へ付いて行った人はおりません。やはり、気候も習慣も違いますから、日本に行っても幸せになれるとは思っていませんでした。

10月の半ば過ぎになると、国民党の軍隊が上陸して来ましたが、みすぼらしくて敗残兵そのものでした。地べたに座って北京語の歌を歌っていました。こんな兵隊が、なぜ戦争に勝ったのか、当時は本当に解りませんでした。買い物をして代金は払わないし、水道を見て、なぜ水が出るのかと驚いているのです。それを聞いて、祖国の軍隊とは言え、本当にかっかりしてしまいました。国民党に比べたら、いろんな面で日本は、ずっとましでした。今でも日本の教育を受けた人たちは、あのまま日本と一緒にいた方が良かったと思っている人が大多数です。

ベトナムの近くに、海南島という台湾とほぼ同じ大きさの島があります。それと台湾を比較してみると、海南島は清朝に支配されたので未開のままですが、台湾は日本が統治したために現在の発展があるのが解ります。私は、そういう話を学生にする使命があるので、80歳を過ぎた現在でも大学で日本語を教えているのです。